

再エネ事業を「じぶんごと」に

土橋 成功事例を横串で見ているのは、「自分ごと」にできるかどうかです。農林水産業からは再エネ事業は異業種に見えるかもしれないですが、言ってみれば「先祖帰り」でしょうね。

吉岡 たとえば昔の農家は薪炭など山のエネルギー資源を当たり前に活用していました。

土橋 そう、だから全く新しいことではないのです。技術革新が進み、太陽や風、森や水を電気や熱に利用するようになりました。その意味で再エネと農林水産業の親和性は高い。組み合わせ方も多彩なんですよ。

吉岡 太陽光発電などの取り組みやすいものを、できる規模から始めることも大切です。

土橋 バイオマスは資源の収集や運搬など課題も多いので、関係者で集まって話し合うことが重要です。

吉岡 人の面では、地域の核になる方、「この人がやるなら私も」と思われる方が取り組んでいる事業がうまくいっています。

土橋 4種類の人が必要ではないかな。農林漁業者、発電事業者、



環境エネルギー政策研究所
研究員／博士(環境学)

吉岡 剛氏

全国各地の地域主導型のエネルギー事業の事業化を支援。
趣味は野球。広島カープファン。

うまくいく？
再エネ事業

共通する成功ポイントや課題とは？

る2人が語りながら、今後のあり方も考えます。

地域を結びつける役割の行政、全体をコーディネートする人。農林漁業者が発電事業者を兼ねる場合もあります。こうした人が集まって、自分たちの本業や地域のためにきちんと考えながら進めてほしいです。

地域をよく見て、したたかに

吉岡 実際に進めていく上では、多くの地域に共通する悩みがあります。たとえば技術や資金調達。これらは専門家や行政の助けが必要になります。

土橋 モチベーションを高めることも重視すべきですが、いざ始めてみると、次に何をやる、その次は、というプロセスが見通せていないと止まってしまいます。実際に始めると、やることはすごく多い。だからこそ順序だてて進め方を整理しておかないといけません。

吉岡 再エネ事業は多くが20年間などの長期の事業となるので、やり続ける体制も必要です。これから事業を始める場合は、他の事例も見ながら、信頼性の高い実績のあるシステムを導入して、着実に進める。うまくいっている事例をよく参考にすることです。

土橋 かしく取り組むということだと思います。他を見て、いいところは評価する、マズいところは避けるようなしたたかさが大事だと感じます。

吉岡 事業化の検討などでは、外部の専門家まかせ

で地域の主体性がないものも多いんです。地域の中で、何のために誰がやるのかはつきりしていないものは、うまくいかないですね。

土橋 地域の資源をどう活かすかを突き詰めないといけないですね。農林水産省としてもその視点は重要と考えています。

本業に役立つ、 手段としての再エネを

吉岡 地域の資源を活かすと言えば、兵庫県宝塚市では都市部と山間部をつなぐ取り組みとして、市民農園にソーラーシェアリングを導入しようとしています。

土橋 香川県の「うさんこやま未来発電所」は出資者に対する配当のプラス分を地元の農産物で返す計画になっています。事例でも紹介している徳島のハッピーソーラーも含め、全国各地で参考にして欲しい取り組みです。

吉岡 長野県の岡木農園は「スマートアグリソーラー」として、ぶどう畑に太陽光発電を設置し、日よけや雨よけにするなど、本業に役立つものに取り組みようとしています。

土橋 地元の水で炊いた米がウマイように、地域資源である再エネを使って作る農産物やそれら加工品はウマイ、となればいいですね。本業としてウマイものを作っていく、そこに再エネで相乗

農林水産省食料産業局
再生可能エネルギーグループ長

土橋 信昭氏

2014年8月着任。趣味は料理。ストレスが溜まるとおもむろに料理を開始。



どうすれば 地域のための

全国各地で始まっている多くの事例に
地域のための再生可能エネルギー事業に携わ

効果が現れれば一番よい。農林漁業に携わる方ならではの再エネの活用を考えていただきたいです。

吉岡 発電のためではなく、本業のために。つまり手段としての再エネですね。

再エネを始めよう！という方へ

土橋 農林水産省では、最初に説明した4種類の人が集う機会をこれからも作っていきます。関心の高い地域には、農山漁村再エネ法の概要説明や優良事例の説明にも出向きます。

吉岡 私たちは農林漁業の専門家ではありませんが、再エネの専門家として技術や資金調達などを支援していきます。小さな成功事例から増やしていきます。いつでもご相談下さい。

土橋 農林漁業に携わる皆さん、ぜひ再エネを身の丈にあった自分ごとにしていきましょう。

